

普通期晩生水稲品種「あきほなみ」の特性

○田中明男・若松謙一
(鹿児島農総セ)

【目的】

鹿児島県の普通期栽培用品種は従来、中晩生品種を中心とした品種構成であったが、早生品種「ヒノヒカリ」を奨励品種に採用後、消費者の良食味志向も相まって、「ヒノヒカリ」の栽培面積が急増し、普通期粳品種の約88%を占めるまでになった。一方で、近年の温暖化傾向に伴う高温登熟の問題、気象災害等の危険分散および収穫期間の労力分散の観点から、中晩生品種が強く要望されている。今回、鹿児島県農業開発総合センターで育成した中生品種「あきほなみ」が2008年に奨励品種に採用されたので、その特性概要を報告する。

【来歴および育成経過】

「あきほなみ」は、多収・良食味・脱粒性難を目標に、晩生で良食味の「99s123(南海107号/西海201号)」を母とし、良食味系統の「越南179号」を父として人工交配した組み合わせに由来する。1999年に交配し、F₁、F₃を温室で世代促進、F₂で熟期選抜、F₄で個体選抜を行い、以降系統育種法により選抜と固定を図った。2004年に「KG276」の系統番号を付し、特性検定および生産力検定試験に供試した。2005年からは「鹿児島30号」の地方系統名で奨励品種決定調査に供試し、2007年には現地試験にも供試し、2008年2月に鹿児島県の奨励品種に採用された。

【特性概要】

「かりの舞」と比較して出穂期で1日、成熟期で2日遅い“中生の晩”に属する。稈長は同等で、穂数は多く、草型は“中間型”である。稈質は“やや剛”で、耐倒伏性は“やや強”、止め葉は直立し、草姿は良好である。芒は稀に短芒を生じ、ふ色、ふ先色とも“黄白”で、脱粒性は“難”である。

いもち病真性抵抗性遺伝子は“Pita-2”と“Pii”をもつと推定され、白葉枯病耐病性は“やや強”に属する。

収量性は高く、「かりの舞」に比べ多収である。玄米の形状は“中”、粒大は“やや大”である。玄米の外観品質は「かりの舞」より優れる“上下”

【栽培上の留意点】

現状では、いもち病の発生はみられないが、侵害菌の動向に注意する。

中晩生品種で、登熟期間がやや長いので、早期落水は避け、収量および品質の向上に努める。

第1表 玄米の外観品質

品種名	背白	基白	心白	乳白	品質
あきほなみ	0.5	0.3	0.3	0.4	4.4
かりの舞	0.7	0.7	1.2	0.3	6.3
ヒノヒカリ	1.5	1.2	1.0	1.4	6.3

注1)数値は2005～2007年の3カ年の平均値

2)背白、基白、心白、乳白は無(0)～甚(5)の6段階評価

3)品質は上上(1)～下下(9)、規格外とした10段階評価

第2表 食味官能評価

調査年	外観	香り	味	粘り	硬さ	総合評価
2005	0.44	0.08	0.19	0.33	-0.01	0.28
2006	0.17	-0.04	-0.09	-0.22	-0.18	-0.04
2007	0.14	0.00	0.05	0.14	-0.05	0.28

注1)食味の数値は2反復の平均値

2)基準は奨励品種決定調査の標肥区ヒノヒカリを用いた

第3表 「あきほなみ」の特性概要

品種名	あきほなみ	かりの舞	ヒノヒカリ
早晚性	中生の晩	中生の晩	中生の中
草型	中間型	偏穂重型	中間型
出穂期(月・日)	8.31	8.30	8.22
成熟期(月・日)	10.12	10.10	10.2
稈長(cm)	78	78	79
穂長(cm)	20.7	21.2	20.8
穂数(本/m ²)	378	325	373
芒の長短	稀・短	稀・短	稀・短
ふ色・ふ先色	黄白	黄白	黄白
脱粒性	難	中	難
耐倒伏性	やや強	強	やや弱
穂発芽性	やや易	難	難
葉いもち	-	やや弱	やや弱
推定遺伝子	Pi-ta2, i	Pi i	Pi a, i
白葉枯病	やや強	中	弱
玄米重(kg/a)	57.1	50.7	56.1
同標準比率	113	100	111
玄米千粒重	24.3	23.1	21.7
食味	上中	上下	上中

注1)数値は2005～2007年の3カ年の平均値